

【平成17年度専修学校教育重点支援プラン事業】

事業名	動物共生や保育、介護の体験活動を通じての心の成長やコミュニケーション能力の向上について		
学校法人名	学校法人 大岡学園		
学校名	国際情報高等専修学校 大岡学園		
代表者	理事長 大岡 豊	担当者・連絡先	総務部長 川崎 学 (0796)22-3786
<p>&lt;事業の概要&gt;</p> <p>本校では、多様な生徒を受け入れる中で、従来のアプローチとは異なった形での教育方法を模索する中、今一番大切と思われる「心の成長」や「コミュニケーション能力の向上」について、動物共生、保育、高齢者介護の体験活動を行うことにより、いかなる効果があるのか、実態はどうか、について調査、研究を行った。</p> <p>実施委員会の各委員の意見に基づき、ニーズ調査と体験活動学習を行ったことを報告し、今後の教育活動に役立てたい。</p> <p>まず、ニーズ、実態調査に関しては、予想以上に調査項目、関連性について探求することの難しさを痛感しながら、豊岡市内中学校5校、高等学校2校、及び本校の併せて8校の生徒約600名に協力を頂き、アンケート調査を実施、実態把握に努めた。これに関しては、調査項目の決定など想定以上に入念な打合せ、下準備を要し、協議を行ったものを分析したものであり、今後一層の検証が必要があると考えられる。データとしては、非常に興味深いものであると言える。</p> <p>ついで、体験活動学習に関しては、従来実施している先進校への訪問視察、意見交換、また動物共生を実践している施設への訪問視察、情報交換など繰り返し、様々な角度から準備を進めた。また、保育や高齢者介護の分野においても、従来兵庫県下で実施されている「中学生トライやるウィーク」を参考にしながら、より一層保育園児や介護施設利用者の生活実態にあわせ、専門職員（本事業協力施設職員）と行動を共にしながら、実践的な体験活動学習に努めた。以下にその概要を記す。</p> <p>①動物共生は犬の特性、飼育方法、トリミングなどを通じて「生」の大切さを学び、生徒が力を合わせ、育成することの重要性を学んだ。  （校内に飼育施設を設置し、犬訓練士、獣医、トリマーの協力を得て実施）</p> <p>②保育については、乳幼児の世話をする事により、優しい心を養い、将来、親になるであろう生徒への子育て意識高揚などを含めて学んだ。  （「チャイルドハウス保育園」において、保育士等の指導を仰ぎ実施）</p> <p>③高齢者介護については、お年寄りを敬う心を養うとともに、実践的な介護体験を通じて、精神面も含んだ様々なケアを学んだ。  （「特別養護老人ホームこうのとり荘」において、介護士等の指導を仰ぎ実施）</p>			

## <成 果>

中学生、高校生、高等専修学校生における動物の世話、乳幼児の世話、高齢者介護に関する体験の実態と意識が明らかになった。動物を飼うことについては多くの子どもたちが経験しており、関心も高い。乳幼児とのふれあいについては、年の離れた弟や妹の世話以外に、体験活動やボランティアなど、いろいろな機会でも乳幼児を世話する機会を持つ子どもたちも増えている。また高齢者介護については、同居の祖父・祖母の世話以外に、ボランティア等で経験する機会も学校教育の中で用意されることが多くなってきた。こうした“尊い命ある存在”“我々が共生対象とすべき存在”との関わりは、子どもたちの適応や人間関係とどのような関連を示すのであろうか。動物の世話については、経験の有無と関連が強かったのは思いやり得点であった。動物の世話をすることで思いやりが身につくのか、思いやりのある子どもたちが動物を飼う機会が多いのか、両者の因果関係までは定かではないが、動物の世話と思いやりの感情とが互いに関連するものであることは確認できた。また、乳幼児の世話についても、きょうだいの世話であれ、ボランティア活動であれ、乳幼児の世話をする経験を有する子どもたちの方が学校でも家庭でも適応的であることが示唆された。高齢者の介護については、祖父・祖母の世話を経験している者と、ボランティアなどの経験を持つ者とは違いが見られるものの、経験のない群が（経験群に比べて）学校でも家庭でも適応が悪く、自己に対しても他者に対しても不安が強い傾向が確認された。

以上のことを考えると、動物の世話、乳幼児の世話、高齢者の介護、いずれの場合もその経験を積むことと、学校や家庭での人間関係や情緒面の安定とが関連している様子が明らかになった。加えて、これらの経験に参加することによる成果（経験者の予測）からは、気持ちの癒しや将来の生活で役に立つなど、いろいろな効果をもたらす可能性があることもうかがえた。“共生の対象となる尊い存在”とのふれあいやその世話をすることで、人間関係が深まり他者とのコミュニケーションにもつながる一方で、自分への自信や安定をもたらすというプラスの成果が考えられる。

人間関係の希薄化やコミュニケーション能力の乏しさが課題とされる現代社会の子どもたちに対し、新しい“心の教育”としての可能性を持った試みは、まだ緒に着いたところである。今回の事業で実施した実態調査・体験活動学習では、動物や乳幼児、高齢者とのふれあい・関わりが、思いやりや人間関係作り、さらには自己や他者への信頼感にまで影響を及ぼす可能性が示唆された。これは、こうした“心の教育”が友人や家族との人間関係とも深く関わる重要なテーマであることを意味している。今後、取り組み内容の工夫と精選についてさらなる検討が必要であろう。

総じて、今回の事業において前述のとおり一定の成果があったことは間違いがないが、この成果をもとに、さらに時間をかけて検証し、実践的な教育プログラムへ展開する必要があると思われる。これは、次年度以降、授業への取り組みもさることながら、適切なカリキュラム・コースを編成、構築していく必要があると考える。